昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十五年五月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十二巻 第五号

（通第三七一号）

目次

63.9.6 ◎ 63.9.6 ◎

能く瓦礫を金に変成せしむ……近角常観……(1)
信を行く旅人抄……池山榮吉……(6)
南無阿弥陀仏……臼杵祖山……(9)
自照日誌抄（20）……西元宗助……(12)
不問語……清水凡夫……(14)
念仏詩抄……木村無相……(18)
法味随想……山田宰……(21)
ともしび……花田正夫……(22)

能く瓦礫を金に変成せしむ

近角常観

彼の仏因の中に弘誓を立つ
名を聞きて我を念ずる者はすべて迎え来らしむ
貧窮と富貴とを簡ばず
下智と高才とを簡ばず
多聞と浄戒を持するを簡ばず
破戒にして罪根深きとを簡ばず
但能く廻心して多く念仏すれば
能く瓦礫を変じて金と成ぜしむ

これは慈愍三蔵が般舟三昧経によりて作れる讃なり。法然上人が選択集を説きたまいたるとき、何時も必ず引用したまいたる文なり。即ち選択集に曰く。

若しそれ造像起塔を以て本願となさば、貧窮困乏の類定めて往生の望を絶たん、然るに富貴なる者は少く、貧賤なる者甚だ多し。若し智慧高才を以て本願となさば、愚鈍下智の者定めて往生の望を絶たん、然るに智慧ある者は少く、愚痴なる者甚だ多し。若し多聞多見を以て本願となさば、少聞少見の輩定めて往生の望を絶たん、然るに多聞なる者は少く、少聞なる者甚だ多し。若し持戒持律を以て本願となさば、破戒無戒の人定めて往生の望を絶たん、然るに持戒なる者は多く破戒なる者は甚だ多し。自余の諸行これに準じてまさに知るべし。当に知るべし、上の諸行等をもって本願と為さば往生を得る者はすくなく、往生せざる者多し。然れば弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を摂せんがために、造像起塔等の諸行を往生の本願となさず、唯称名念仏の一行をもって其本願となすなりと。而して此文を引用して証としたまえり。

噫、如来はかくまでも我等が根機を洞察したまえり、如来はかくまでも我等が罪悪を憐愍したまえり、如来はかくまでも我等が無智を照見したまえり、如来はかくまでも我等が煩悩を矜哀したまえり、実に我等は煩悩の塊なり、土なり、石なり、鉄なり。

しかるに大悲の御心は殊に瓦礫頑石の如き我等を哀愍悲

憐して飽までも見捨てず救済せんと宣える。これ若不生者（若し生れずば）の弘誓なり、摂取不捨の本願なり。この本弘誓願あるにあらざれば無慚無愧の我等いかでか光明に接したてまつるべき。幸に大慈大悲の御力に打勝たれて、如何に不真不実の我等もはじめて如来の膝下に廻心懺悔し奉るべきなり。

我等過去を顧るに、自ら理想を形作りて、自ら清浄なりとし、自ら真実なりとして、以て心中自ら頼みとしたるときありき、否信後の今日といえども、なお常に之に走らんとし、自ら清浄なりとするがために、他を不清浄とす。而して他を不清浄なり、不真実なりとすることが、すでに大なる不真実不清浄たるを悟らず。

聖人曰く、一切の群生海、無始より以来乃至今日今時に至るまで穢悪汚染にして清浄の心なく、虚仮諂偽にして真実の心なし、と。かくの如く経去り経来れば、自ら理想を形作りて、以て自ら高しとすることごとく皆迷妄なり、誤謬なり。ここにおいて富貴を以て貴とするに足らず、高才も以て高しとするに足らず、多聞も必ずしも何等の力もなく、浄戒必ずしも清浄なりと言うべからず。これいわゆる定散自力の権仮の清浄真実なり。一たびこの点に想到せば、我等不真実の塊なり、不清浄の塊なり。すでにこれ下智なり、無智なり、愚痴なり、破戒なり、無戒なり、罪業深重の一塊肉なり。

予十七年前煩悶きわまりて、心中闇黒をもって蔽われたるの時、起りたる最後の感想を回想せずんばあらず。おもえらく、すでに学問も何の益もなく、才智も何等の力もなく、かって万物の霊として自ら誇りし昔の大きに誤りたることを悟れり。今や煩悩の一塊肉として残されたること路傍の土塊瓦礫と何の選ぶことかあらむと。かって空想しておもえらく、彼の磊々たる木石また吾人の想到すべからざる感覚を有して宇宙に自立自存するにあらざらんやと。而して此時あたかも正反対の思想起りて我智識ありと称すといえども、心中常に煩悩のために蔽われ、罪悪のために苦しめらる、実にかく無識頑冥の木石の磊々たると何の選ぶところかあらむと。これ実に吾人の真価なり、吾人の無価値なり。この頃この慈愍三蔵の偈を読みて、瓦礫の文字に到りて、過去を想到せずんばあらず、而して今なお吾人自身を顧みるときは依然として旧の如く、瓦礫なり、木石なり、土塊なり。聖人曰く。

誠に知んぬ悲哉愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、恥ずべし、傷むべし、と。ああ当時、我を介抱し、我を看護したまいし母公のなお我を護持養育

したまうを思えば、あたかも阿闍世王の韋提希夫人におけるが如し。而して聖人とくにこれを信後悲歎の下に引用したまうを見れば、我等は現にこれ罪悪生死の凡夫、煩悩悪業の一塊肉として、瓦礫木石と異ることなきを感ぜずんばあらず。蓮如上人曰く、その御恩を知らざるものはまことに木石に異ならんものか、と。南無阿弥陀仏。

この如く不真実なる我等に対して、飽まで見捨てたまわざる清浄真実の友なきや、この如き瓦礫土塊の我等に対して徹底貫通する慈悲なきや。我もし清浄ならば人また清浄をもって我を迎えん、我もし真実ならば人また真実をもって我を遇せん、されど、我毫も清浄なく真実なし。かくの如き不清浄、不真実なる我に対して、誰か清浄真実をもって迎うべき。されど我等、無始より已来今日今時に至るまで穢悪汚染にして清浄なく、真実なし。その不清浄、不真実なるにあきれずして、これを悲憫して、飽くまで見捨てたまわざる清浄真実の御親こそ、実に阿弥陀仏にてまします。否、その大慈悲大誓願の本源より永劫清浄真実の御心をもって我等を悲憫したまう結果、遂に正覚を成じたまいし御姿こそ、即ち今の阿弥陀如来にてまします。

彼仏の因中に弘誓を立てたまえり「名を聞いて我を念ぜばすべて迎え来らしめん」と。予かって煩悶に陥りてその極に達して、瓦礫土塊の感をなしたるの後、初めて内心一点の光を認めたるの時おもえらく、予が如き穢悪汚染の者にあきれずして、これを悲憫したまう大慈大悲の塊は即ち阿弥陀如来なりと、ここにおいておもえらく、仏はこれ慈悲の塊なり、恵みの結晶なり、いかなる罪悪の塊もとかされ、いかなる愚痴の結晶も照らさるるなり。闇黒なる鉄の如く、頑冥なる瓦礫の如く、冷やかなること氷の如き我等も、慈悲の塊たる仏陀に融かされ、知恵の光明に照らされ、煩悩の氷とけて功徳の水となり、鉄も石もとかされて、ことごとく慈悲の光耀の金となるなり。「唯廻心して多く念仏せしむれば、能く瓦礫をして変じて金と成らしむ」と、実にこれ予が入信当時の実験を回想せずんばあらず、昨の煩悶はたちまちにして今日の光明となり、昨の闇黒は今日の慈悲となり、煩悩を断ぜずして菩提を得、生死即ち涅槃なりと証知せしむ。和讃に曰く。

無碍光の利益より　威徳広大の信を得て、
かならず煩悩の氷とけ　すなわち菩提の水となる
罪障功徳の体となる　氷と水のごとくにて
氷多きに水多し　障り多きに徳多し、と。

我等が信仰の上において、特に最も味うべきは能令の二字なり。実にこれ他力の至極をあらわし、如来の大悲を尽くされたるものなり。西岸上の教勅に曰く、「汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん」と。愚禿鈔に曰く「能の言は不堪に対するなり、疑心の人なり」と、実に如来の御力の広大にてましますことを頂き奉るこころなり。而してこの御力を心中に深くいただき奉る信相もまたこの能の一字をいただくにあり、蓋し信心というは他にあらず、我等が罪悪深重と、その罪業に打勝ちたまう如来の御力とのちからくらべなり。能の一字は実にこの如来の御力を示したまえる御言葉なり。而してこの一字を心中に深く味い奉るは即ち大悲に夜の明けたる姿なり。そもそも信の一念とは如来の真実と我等が不実との角力なり。信前には勿体なくも如来の大悲に対して我等が反抗し奉る有様なり。

唯信鈔に曰く、世の人常におもえらく、仏の願を信ぜざるにはあらざれども、我身の程を案ずるに罪障のつもれること多く、善心の起ること少し、心常に散乱して一心をうることなく、身とこしえに懈怠にして精進なることなし、仏の願深しといえどもいかでかこれを迎えたまわんと。この心まことに驕慢を起さず、貢高のこころなし。しかはあれど仏の不可思議力を疑うのとがあり、仏いかばかりの力ましますと知りてか、罪悪の身なればすくわれかたしと思うべきと。

かくの如く我身の罪悪の深きを歎くも結局如来の御力に打勝って、仏の願深しといえどもいかでかこれを迎えたまわんと思うなり。これ実に愚禿鈔に、不堪とのたまえる意なり。畢竟疑心の人なり。しかるに如来の御力は願力無窮にして我等が罪悪深重をも重しとせず、仏智無辺にましませば散乱放逸をも捨てたまうことなし。如何なる罪業深重なる我等も、如来の御力の深重にましますに打勝たれて、この如き罪業深重の我等にあきれたまわず、益々これを悲憫したまう御慈悲の不可思議を信じたてまつるなり。不思議というは罪業深重の我等が不実にあきれたまはざる如来の清浄真実のきわまりなきに驚きたてまつる言葉なり。この如く我身の悪しきを歎くも、つまり如来の御力を疑うこととなりて、結局如来の御力に反抗し奉る態度なり。いわんや正面より如来の存在を疑い、我身の悪しきをも悟らず、我身の不実をも不実とも思わずして、これがために大悲の御胸をいたましめたまう如来の清浄真実を空しくするは、最も正面より反抗し奉る態度なり。されどかかる我等を如来はますます見捨てたまうことなし。遂にこの如き不実をとがめざるのみならず、むしろかかる不実なる点を特に憐れみたまう御力の深くましますが為に、宿善開発の時到りぬれば、我等がかって反抗し奉りしだけますます我等が悪しきを知り、我等が疑いたてまつりしだけ、ますます大悲の広大なるを信じたてまつる。如何なる強情我慢の我等も

如来の大悲極りなきに打勝たれて、真心徹到のあかつき廻心懺悔の涙に泣かざるを得ず、これ実に能令瓦礫変成金の真義なり。浄土論に、能令速満足功徳大宝海とのたまえるもまたこの意にてまします。この如く我身を歎くも、反抗するも如来の御力を疑いてこれを空しくするのみならず自ら罪を甘受し、如来に面従しつつしかも如来の御苦労を空しくすることあり、これ他力信仰者の最も戒しむべき点なりとする、真に大悲に醒めずして、先ず自ら浅間しき者なりと頭を下げ、言葉のみにて、此の如きものを助けたまうは如来なりと云うが如きは、つまり大悲の御心を頂かずして、すでに自ら知っているような言葉をするものにして、自ら頭を下ぐるは所謂体をかわして如来の御力をして空を打たしめたてまつるなり。

それ入信の経験は、初めより予想されたる如き信仰に入るものなし。我等が如来に負けて信を取るなり、思いがけなき経験をもって信心をいただくなり。我等は自己を正しとする時は如来は消え失せたまうなり、我等は自己を罪深しと歎くときも如来の御力を空しくし奉るなり。

初めより罪深しと頭を下げたるときは、如来の御心配を水泡に帰せしむるなり。御慈悲を知り了せるが如く考うるは、未だ仏智不思議を了知せざるなり。この如く不実を飽まで見捨てたまわざる清浄真実の御心は如来の大悲大願なり。すべて水火の二河に堕せんことを畏れざれとのたまうは如来の御心なり。真心徹到したるの一念はじめて過去の一切みな罪悪たることを自覚するなり。煩悩具足の我等は何れの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願を起したまう本意、ひとえに悪人成仏のためなることを自覚するは、これこそ彼の因を建立したまえるを了知するものにして、真に仏智不思議を信じたてまつるものと言える。これ破戒と罪根の深きを問わずとのたまう所以なり。この如き大悲大願に遇いたてまつれば、誰か廻心懺悔せざるべき、如何なる頑冥なる瓦礫も変じて能く金と成らしむべし、如何なる凡愚も能くすみやかに功徳の大宝海を満足すべきなり。南無阿弥陀仏。

◇◇

伊藤左千夫歌集

さびしさの極みに堪えて天地に寄する命をつくづくとおもふ

人心あやぶきものと思ひ知り尊きみ名をせめて申すも

吾がこころ暗くしあればみ仏の光こほしみ止む時もなし

信を行く旅人抄

池山榮吉

子ゆえの廻向

久遠の昔から苦悩の旧里に彷徨している私、如来の子である私のために、如来は慈父母として御心を痛め、やむにやまれず五劫の思惟されて、救いの方法を案出されたのであります。

その方法とはほかでもない、信の一念であります、「念仏まうさんと思いたつ心」であり、絶対他力の信心であります。この信心、この一念が、私の心におこるよう、それによって間違いなく往生成仏できるよう、如来はあらゆる善徳を、一つのこらず私にふりむけて下さったのであります。これが真宗、即ち親鸞聖人の仰言る、如来廻向、こちらからは不廻向、弥陀廻向の信心であります。

専ら如来からふりむけて下さる廻向が、時節到来して、私の心にとどいたのが「如来よりたまわる信心」でありまして、それがいただけると同時に、自然に念仏がまうされるようになるのであります。

兆載永劫の修行は　阿弥陀の三字におさまれり
五劫思惟の名号は　五濁のわれらに附属せり

とはこの消息を明らかに讃えられた和讃であります。

星の光が地球にとどくには、幾光年の経過を要します。短いもので数十年、長いのになると百年、数千年、それ以上におよぶものもあると聞きます。或はまだ光のとどかない程の遠距離にある星もあるでしょう。仏の尽十方無碍の光明は、十劫以来、私の身辺を囲繞していたのですが、—私が信心をいただいたとすれば、—今になってようよう心の奥にとどいたのであります。今まで私は、心のうちにみちみちていた、無明煩悩という叢雲で、あくまで抵抗を続けて来たのであるます。それなのに如来は、そのしぶとさに呆れられず、終始一貫、あくまで摂取の初一念をまけられず。うまずたゆまず私にむかわせられたのであります。その結果、今までは片思い的関係が一変して、一心帰命の親子の名告りとなったのであります。つまり如来が、大海

の水を一人ではかるかの根気づよさと、救いの手廻しの周到さに、私の方で呆れたからであります。

信心は如来の慈悲に呆れるということであります。何んのことはない、慈悲と我慢の綱引きであります。如来の根気よさに呆れはてる、我慢が手を放した途端、さすがの我慢もずるずると、如来のふところに引寄せられてしまうのであります。

さてその手を放したところが無義、引かれるままにまかせるのが為義、義なきを義とす、の妙境が、こうしておのずから開かれます。それからは「ただそれぞれと弥陀の御恩の深重なること」が思い出され、「念仏もまうされ候」となるのであります。

本願力にあいぬれば、むなしくすぐる人ぞなき
功徳の宝海みちみちて、煩悩の濁水へだてなし

これというのも、弥陀の本願をまかせてしまうほどの悪がないからであります。

世には、古今にわたり内外を通じて、数かぎりもない宗教があったでしようが、救済者が被救済者のため一切の準備をととのえて、その必然の結果として信の一念を発起せしめ、それ一つによって間違いなくたすけ遂げるという、醇の醇なる絶対他力の宗教は、わが真宗をほかにしては、またとありません。

聖人は、教行信証の総序に「ああ、弘誓の強縁は多生にも値いがたく、真実の浄信は億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」と、おっしやっていますが、このお言葉を拝借して、ここに私共の衷心のよろこびとさせていただきます。

時節の到来

釈迦弥陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を　発起せしめたまいけり

この和讃の意義は、信後においてほんとうに肯定されます。信仰はたまわるもの、宿善によるものだからと云って、寝て待て式に、こっちの知ったことじやないと、ほっておいてよいという次第はありません。蓮如上人も、油断なく手に手をつくした上で事が出来ればこそ、時節到来とはいうべきで、宿善、無宿善というのも、油断なく聴聞に心かけての上のことである。「信念はきくにきわまる」と云っていられます。

人事を尽くして天命を待つとは、獲信の上にもあてはまる原則です。それにつけても望ましいのは、出来るだけ聞きもし、読みもすることでありますが、同時に聞いたり、読んだりしたことを、ひしと身にひきあてて味わい、考えてみることが何より大切なのであります。またせめて口ぐせになりと、念仏を称えるようにすることも、信への過程の一方法である、と信ずべき理由があります。

終りにもひとつ大事なことは、信心を求める上に、十分に信頼し得べき人を発見することです。歎異抄の著者が、序文に「幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」と仰言ったのがそれであります。

私の場合は、聖人を「よき人」と仰いで、仰せのままを信じさせていただいたのであります。

なお一言しておきますのは、宗教はもとより或程度の知を予定しますが、知のおよばないところに信の領域、宗教本来の天地はあるのです。「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」とさえ聖人は言っていられます。で、お互絶対他力の教をきくときは信ずるということが肝要なのであります。その信はすでに申述べた通り、恰も水をのんで、その味いを語ろうとするようなもので、ほとんど説明か不可能であります。そこで私はここで、ただ水を飲んだ前後の経験をお話して、皆さんに水をあがるようにお勧めするにすぎないのです。くれぐれも、皆さんが、その目指す標的をあやまって、見当ちがいの方角にさまよわないように、御注意をねがいます。

『光輪』抄

足利浄円

古来聖人の真の仏弟子としてそのお生活において感銘せられてあるものに、三哉、三徹という言葉がある。

哉はかなである。徹は徹底して捨てることである。聞いて聞いたという底を捨て、信じて信じたという底をすて、慶んで慶んだという底をすて、聞思して聞思したというようなものを皆すててしまわれたのである。

聖人の三哉のお言葉をあげると、

一、誠なる哉、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ……これをもって聞くところを慶び獲るところを歎ずるなり。

二、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快ます、恥ずべし、いたむべし。

三、慶しい哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し

といわれている。聞いたとか、信じたとか、慶んだとかいうことが、そうしたことに囚われたり、執着したりするものでなく、聞いて聞いたものの底をすて、信じて信じたというものの底をすて、慶んでもその慶んだということの底をすてて居られる。

南無阿弥陀仏

臼杵祖山

一　仏陀は我等が怠弱に流るる時における
　　奮猛の師父母なり

二　仏陀は我等が逸楽に耽れる時における
　　覚醒の師父母なり

三　仏陀は我等が虚栄に憬るる時における
　　質直の師父母なり

四　仏陀は我等が暴慢に奢れる時における
　　謙譲の師父母なり

五　仏陀は我等が軽挙に馳する時における
　　慎重の師父母なり

六　仏陀は我等が妄動に走する時における
　　穏健の師父母なり

七　仏陀は我等が権勢に阿ねる時における
　　正義の師父母なり

八　仏陀は我等が私欲に曲れる時における
　　公道の師父母なり

九　仏陀は我等が邪路に迷える時における
　　正道の師父母なり

一〇　仏陀は我等が無節に仆るる時における
　　節制の師父母なり

一一　仏陀は我等が親愛に悖れる時における
　　純孝の師父母なり

一二　仏陀は我等が大義に逆える時における
　　誠忠の師父母なり

一三　仏陀は我等が不平に歎ける時における
　　温和の師父母なり

一四　仏陀は我等が不満に慍める時における
　　円満の師父母なり

一五　仏陀は我等が斗乱に犇めく時における
　　平和の師父母なり

一六　仏陀は我等が破壊に摧くる時における
　　建設の師父母なり

一七　仏陀は我等が微賤に屈める時における
　　豪貴の師父母なり

一八　仏陀は我等が垢濁に穢るる時における
　　清浄の師父母なり

一九　仏陀は我等が邪悪に陥れる時における
　　正命の師父母なり

二〇　仏陀は我等が遅疑に惑える時における
　　深信の師父母なり

二一　仏陀は我等が暗黒に襲わるる時における
　　光明の師父母なり

二二　仏陀は我等が恐怖に襲るる時における
　　温柔の師父母なり

二三　仏陀は我等が逼迫に撃るる時における
　　寛裕の師父母なり

二四　仏陀は我等が非義に貪る時における
　　廉恥の師父母なり

二五　仏陀は我等が残虐に荒さむ時における
　　慈愛の師父母なり

二二六　仏陀は我等が忘恩に慣るる時における
警策の師父母なり

二二七　仏陀は我等が背徳に狎るる時における
叱正の師父母なり

二二八　仏陀は我等が不貞に腐るる時における
貞操の師父母なり

二二九　仏陀は我等が優柔に躊(ためら)える時における
決断の師父母なり

二三〇　仏陀は我等が偏頗に傾ける時における
中庸の師父母なり

二三一　仏陀は我等が病患に悩める時における
健安の師父母なり

二三二　仏陀は我等が悲痛に叫べる時における
慰安の師父母なり

二三三　仏陀は我等が陰欝に塞(ふさ)げる時における
快活の師父母なり

二三四　仏陀は我等が寂寞に沈める時における
慶喜の師父母なり

二三五　仏陀は我等が生死に苦しめる時における
涅槃の師父母なり

二三六　仏陀は我等が煩悩に狂える時における
菩提の師父母なり

かくて我等の現在および、永遠の過去と永遠の未来とは全くこの仏陀、師父母の御手にすでに救済せられ居るなり

南無阿弥陀仏

（註）以上は山口県美弥郡秋芳の阿武至朗氏がプリントして下さったものであります。

自照日誌抄（20）

——遺弟の自覚——

西元宗助

この三月は思いがけないことで、山陰の浜田に、それから東北の山形に参りました。風邪(かぜ)をひかぬことを、ひそかに自慢していましたのに、三月というのに軒(のき)まで雪のある山形近郊の法讃寺さんで、ついに二年振りに風邪にとりつかれてしまい、熱こそは出ませんでしたが、しばらくは鼻をクシュン・クシュンといわせました。皆さま、ほんとうに油断は大敵、自慢は禁物であります。

○

そのお寺さんで、そこの前坊守のおばあさんの亡くなる前のお言葉は、一呼吸一呼吸が有難うございます、であられたと承る。このおばあさん、ほんとうによく出来た方でおありでした。ありがとうございました。

○

俺が俺がという真暗い我執の妄念の、無尽にして熾盛(しせい)なることに、ただ驚く。米沢から上野経由、帰途につきましたが、その車中、黙然として静坐しながら、妄念の去来にただ身をまかせる。

○

大石順教尼のことで、心うたれたことは沢山ありますがその中の一つ。あるとき、足の悪い子に対して順教尼、「あんたね、よく転ぶでしょ。どうしてだか、おわかり。転ばんで歩けるこつ、教えてあげましょ。それはネ、悪いほうの足をかくさんこと。

右は一灯園の石川洋氏らとの対談中、最後にお話しいただいた順教尼の、あるときの殊玉の言葉である。このお言葉を承って、ああ、今日は、よい日であったと心から感謝したことでありました。

○

三月二十三日（日）は、故佐々木徹真氏の三周忌。ほんとうに日のたつのは早いものであります。佐々木家で、午

后二時から浅田純雄師お導師のもと、阿弥陀経が誦せられ、終って井上善右エ門兄のねんごろな御法話が、佐々木兄を偲びながら、縷々としてなされました。

残念乍ら私は、この三月で一応大学を退きますので、その送別会に出席のため午后四時前には心ならずも中座せねばなりませんでした。（なお四月から一年間は、客員教授として、従来通り京都産業大学で講義だけは担当させていただきます。）

○　○　○

四月一日（火）待ちに待ちたる御本山の伝灯奉告法要の初日、新調のモーニングを着用し、午后一時半に本山の大玄関に着くと、もう沢山の招待客。係りに案内されて御影堂にいたり、御内陣の南側の椅子席に一応着席。その前方の席にはスリランカの駐日大使はじめ、御歴々。

この上座部の席は、どうにも落着けぬ（わたしは門信徒なのです）と、困りきっていると、顔見知りの係りの方が、私を含めて十名ばかりの後方のものを、こちらにと連れていってくださる。それは御内陣を正面にした弘報関係・写真班席の最前列で、願ってもない場所でありました。

まず「縁儀」というお練りがはじまる。先頭に幼稚園・保育園代表の子どもたち。それが実にかわいらしい。そのあとは、それぞれ威儀を正した盛装の古式床しい行列で、前門さまも御門主も、わたしどもの着坐している前を、しずしずと歩を運んでいかれる。わたしのうしろでは各新聞社のカメラのシャッターを切る音が、しきりにする。

やがて御門主を導師として法要が厳粛に行なわれ、そのあと各界代表の祝辞。それについで前門さま。最後に若き門主―二十四代即如上人―のご挨拶。殊に「私はここに宗祖親鸞聖人の遺弟としての自覚のもとに（略）新しい時代に生きる念仏者として、力強く一歩をふみ出そうと決意するものであります」の結ひのお言葉にいたり、御門主の真正面に坐していた私は、感動のあまり、胸がいっぱいとなりました。「遺弟の自覚」、そうでございます。宗祖聖人も「如来の遺弟悲泣せよ」と「遺弟の自覚」から立ちあがられたのでありました。

○

そのあとの「鴻の間」での立食のレセプションでは、京都大学の平沢興先生や林田府知事、それにNHKの清水プロジュサーらと御一緒でありましたが、東本願寺の嶺藤宗務総長の代表祝辞のスピーチは特に感銘の深いものでありました。その間、ご門主、お裏方お揃いで、私どものテーブルの所にも廻ってこられましたので、わたしは平沢先生の背後にあって、感激微笑をもってご挨拶にかえたことでありました。なむあみだぶつ。

不問語

清水凡秀

○

私は常に思います。相手を憎む心をもちながら、相手に憎まれないようにと願う矛盾した考えを持って、言葉の虚飾によって相手をゴマ化し好い人になって居たい。

言葉はどんなに虚飾されても、表現がどんなに巧みでも、その言葉を語る人の心によって言葉に価値が出来る。言葉の表現はその人々によって皆ちがう。

甲の人の口から出て人に感動を与えた言葉でも、乙の人の口から出るとまるで何の感じも与えない事はままある。それは無理からぬ事で、真実なその人の叫びであったなら、表現法はたとへまずくても必らず相手に通じるものだと信ずる。

○

リンゴが木の枝から落ちたのを見たニユートンが、地球の引力を発見した。発見とは頭ででっちあげることではない。上から下に落ちる地球の引力に厳然たる存在に動かされてニユートンの引力発見を余儀なくせしめられた。

歎異抄の「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず云々」とあるのとまったく同じ意味にあじわされる。釈尊の頭ででっちあげたみ教えなら、弥陀の本願まことにおわしまさば……の文句は全然不必要だ。釈尊は、弥陀の厳然たる存在に動かされて弥陀の本願を説かれたのである。

ニユートンの場合を歎異抄の言葉を借りて云えば、地球の引力まことならば、ニユートンの説、虚言なるべからずと味える。

（昭和九・六月）

○

ある塗師のもとに行った、塗師は語りながら何かを黒塗に塗った。ほんとうによく光った。ハアよく出来たなあと思っていたら、砥石かなんかで惜しげもなくとぎはじめた。そして光を消してしまった。

なるほど渋味のあるおちついた塗り方になった。一体こ

れは何という塗り方か知らと、塗師に問うと、「艶消し」だと。

私は、常に黒塗の光っているように、外見のよい歩みをして悧巧振りたくなる。そして落ちつきがなく、人が認めてくれぬと淋しい。ア、艶消しの境地が欲しい

（昭和九・八月）

○

去る日、馬のせり売りに行って見た。沢山の馬が取引きされた。一頭毎に値がせられて行く。私のような素人から見て意外な感じがすることが多かった。それは骨格の良い大きな立派な馬でも値が安く、それほどと思われぬ馬が途方もない値で売られて行く。段々皆の話を聞いたら、主因は血統にあることを聞かされて、ほんとうに血が大切だ。

これが信仰だ。こうなったから信仰を得たのだと、頭できづいた信仰が何の力になろう。私の上にそそがせたまうやるせない仏様の血の涙、その涙の血の私に通うことによって、始めて私をして私たらしめていただくことが出来るのだ。ほんとうに血が大切だ。

（昭和九・十月）

○

一体、世の中で人の顔が別々な様に、境遇やら、個性やらが違うのだ。それになお、問題だって同じものは世の中にあるものじゃない。また問題のたびに相手に違う、いやそれ以上に自分の心が毎日変るじゃないか。そこに気づかせられたときに、種々の問題の解決に進む力は、自分の足もとを明かにしなければ出来ぬ。足もとが暗いとつまづくだけだ、いや進むに元気が出ない。だから教えの光によって自分の足もとを照らしていただくことが、根本問題だ。そこに個々別々の解決が生れるわけだ。それから他人様の解決についても理解出来るようになる。

経済界の不況から銀行の破産が生れ、債務者の苦しみは大晦日をひかえて極度に達した。無論それは借りた者の不始末と云えばそれまでだが、痛ましい限りだ。そのいたましさの中にいる自分の姿、ほんとうにおはずかしい。苦しむ自分の当然さに、こぼしたい愚痴さえ出ぬ。そうした中にお念仏の力強く働きたまうこと、ただただ有難い。

お念仏によって、見得ざる自分の姿を見させていただき、苦しみながらも、その苦しみの当然さに逃げようとする私の心が敢然として立ちあがり、その苦しみを両肩ににない、力強い歩みをさせていただくこと、またなく有り難いことだ。

（昭和九・十二月）

○

お天気で困る人もあると思えば、また雨ふりで困る人もある。その人々が各々神様に祈願をこめて、めいめい勝手

なお願いをたてる。神様ならずとも、まったく困るはずだ。我々の願い、それは一体どんな願いか。

どの願いでも、結局私の都合の良い欲望を満足さす願いだ。それは真実に願わなければならぬ事であろうか。それ以外に願わねばならぬ願いがあるだろうか。

私は本年四十二才。俗に世人の云う厄年だ。まず年の始めの二月に父を失い、その後次ぎから次ぎと経済問題や何やかにや湧いて来る。が、然しどの問題だとて一つとして意外と思う事件はない。始めからわかりきって居ながら、その始末をなし得ずにぐずぐずと今日にいたったので、その結果として現れたことばかりだ。父の死と云い、経済問題と云い、一つとして厄年なるが故にと、いう理由はない、すべて私の業の現れだ。唯それをうけて行くだけだ。

（昭和十・十月）

○

毎年真宗寺院及び門徒の行事として報恩講が営まれる。そして然るべき御講師のねんごろなお話がある。祖師聖人の恩徳をしのびまつる上に有難いことである。しかし信仰問題はいかに宿縁のあつい人でもその短期間において心の不安が解決つくものではない。不断の心掛けがもっとも大切なことと思う。

年一回の報恩講信者になりきるのはいたましいことである。報恩講がすぎると、御信心の溝（みぞ）をさらえることを心にかけずに一年をすごし、又もとの黙阿弥になって報恩講をむかえるのではかなしいことである。

生活に即して信仰を求めるならそんな生ぬるい事ではおさまらぬはずだ。しかし唯一度であってもお詣りすることは決して無意義とは云わぬけれど、折角の御縁が生活と結びつかぬことは、なさけないことである。大切に相続せよとは、いつも教えられることである。

（昭和十・十一月）

○

私の知人で弓の師範をしている方のお話によれば、弓の弦を張って向うの的（まと）を無心に見つめていると、不思議や、的の方から手元に近づいてきて、矢の先にせまって来る。その刹那、弦をはなてば、あやまたず百発百中とのこと。非常に面白いことだと思った、なかなかに的が手元に来るまでは容易なことではない、無我の境である。

子供が無心に遊んでいる様を見ていると本当に面白い。玩具が無ければないで、それ相当の道具を見つけ出して、それなりに遊んでいる。高価な玩具でなければ子供は育たぬと限らない。私は高価な玩具の道具だてを要求している。それが揃わなければ、心の平安な生活が出来ぬと思っている恥しいことだ。

（昭和十一・四月）

○

「私は極悪深重の凡夫であるとは思いますが、どうしても光を見出し得ませぬ」と、さる人のおたずね。

一応ごもとっもとうなずかれた。一体自分自身を見るに、どうしても自分に都合のよい見方より出来ぬその私が、いつの間にやら、いくらかでも私は罪深い浅間しいものであると見せて頂いたのは、一体どうしてであろうか。夜行で富士山の前を通っても、富士もあり、見る目を持ちながら見ることが出来ない。光があればこそ秀峰を仰ぐことができるのだ。それなのに、自分が極悪悪人と知ったことが自分の力でそう見ることが出来たのだと、光によって見せられながら光の中にいることに気付かずに、外に光を求めようとしているために、光を見出し得ないのではあるまいか。

（昭和十二・十月）

聞光願生

春風駘蕩、人の心も和やか、花また笑わんとす。されど悩みかる身にはいづこかに春来れるやを知らず、春はわが心いかんにあり。されど、周囲の環境によりてわが心に春を味わんとす、難きこと、木によって魚を求むるの類か？春光いかにうららかなりとも心までは照らさじ

幸いなるかな、今、如来の慈光にあい奉り、心の底より湧き出づる歓喜に、かたくなの煩悩の氷いつの間にやら解けそめて、ここに心の春を味う。人に生れて、心の春にあわずして空しく終るは、実に心残りのことかな。

心の春！それは無量寿の生命にして、永久に生くる道なり。過去久遠、未来永劫の限りなき時の間に、ケシ粒にも譬えるべきこの人の世をして、最大の価値あらしむべきは、そも何物ぞ。学問か？あらず！位階か？あらず！金か？あらず！健康か？あらず、心の春にめぐり合う、唯一の道あるのみ。何故ならば、前者はこれ無常のものなればなり

（昭和十一・三月）

○

無色の太陽の光線にあたると、、すべての物がそれぞれ個性の色をあらわす。そこに百花燎爛の世界がひらける。無色とは色のことではない、すべての色を包含していることだ。無我の心によって、はじめて相手の個性やら立場を理解して、そこに一色となって涙をそそぐ世界だ。

相手を理解して涙をそそぐ世界は、自己に目覚めさせていただくところから生れる。自己の値打に見覚めずして、如何に相手を理解し得よう。自己の値打を知るには、自己の姿を鏡にうつさねばならぬ。

念仏詩抄

木村無相

老いの暮れかな

香師お歌に　　香師—香樹院徳龍師

〃悪道は
日日（ひび）に近くぞ
なりにけり
あわれ悲しき
老いの暮れかな——
極楽は
日日に近くぞ
なりにけり
あわれ嬉しき
老いの暮れかな——〃

わが身は
今年七十五
老いの暮れかな
老いの暮れかな

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

みんなウソ

香師おおせに
〃常にウタガワヌ人にも
金を貸すときは
ウタガイがおこる
これは大事なことゆえ
じや——〃

まして後生の一大事
ウタガイおこらぬ
ハズがない
ウタガイませぬは
みんなウソ
信じていますは
みんなウソ――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

本性をあらわすと

香師おおせに
〃悪縁にあうて
本性をあらわすと
みんな
阿闍世（アジヤセ）のごとく
わが身につまる時は

わが母をも殺す
気になる――〃

ああ
本性　本性　本性――
いくたび親を殺せし
ことか――
いくたび死ねと
思いしことか――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

みんな六字の

香師おおせに
〃五劫のご思惟は
このわたしのための
ご思案なり
永劫のご修行は

このわたしのための
ご修行なり――
これを与えたもう
六字の名号なり――〃

五劫のご思惟も
永劫のご修行も
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
みんな六字の中味とは
――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

骨おりて聞くべし

香師おおせに
〃タノメとあるも
スガレとあるも

称えよ称えよとあるも
みな
助くる助くるのおおせなり
天が地となり地が天となる
ためしあるとも
まちがわさぬの
アミダ如来のヂキのおおせが
聞こえるまで
骨おり聞くべし――〃

ヂキのおおせとは
今のナムアミダブツ
そのおこころを
骨おりて聞くべし――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法味随想

山田　宰

「ヨーロッパは一言で云うとお念仏のない国だ」とある方がおっしゃった。まさにその通りであると思う。日常生活において何か問題が起って口論となる時は、大抵「私は正しい」「あなたは間違っている」というような議論になるのが普通である。自分は正しい事をしようとしているし、皆もそう努力すべきである。これはキリスト教によって長い間培われてきた人々にとって当然なことであろう。

ある熱心なフランスのカトリック信者に『歎異抄』を紹介した時、最も受け入れ難い個所として「善導の自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常にしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身と知れ、という金言云々」の所を指摘された。ヨーロッパでは善悪ということをはっきり割り切っている。日本のように喧嘩両成敗とか、相対五分五分という考えが日常生活の中にないと言ってよい。たとえば交通事故で、車が人をはね飛ばした場合、人が横断歩道を通っていなかったら、はね飛ばされた人人の方が悪いのであって、補償はしてもらえない。日本のように運転手の前方不注意などという、両成敗的な解決はない。勿論、運転手が何か交通規則を守っていない事があれば、両方とも悪いという判断も下される。このように間違っているかいないか、白か黒かという考え方が非常にはっきりしているといえよう。

かえりみれば、私自身も多かれすくなかれ、こんな考え方をしてまた賢善精進の道を歩もうとしていたのであった。自分はよいことをやっている、すくなくともしようと努力していると思っている自分には、自身の煩悩具足の凡夫の姿は見えない。

しかし何時しか機が熟し、自分の本当の姿の一端を知らされて見ると、〃出離の縁なき身〃のお言葉が身に浸みてくる。それは仏の大悲にしっかりと抱かれて始めて知れる現実の自分の姿である。如来に折伏せられて如来に帰依するというか、まさに無根の信である。こうした観点に立つと念仏から最も遠いと思われるヨーロッパ人が、意外とお念仏に近い所にいる場合もあるのではなかろうか。

ともしび

花田正夫

光明寿命の誓願を
大悲の本としたまえり
（浄土和讃）

親は子になくてはならぬことのために昼夜に専念するが、仏の大悲大願は、もとよりわれらにどうしても必要なことのために辛労して下さる。

光明無量の誓願は、われらが煩悩にいつもさまたげられて到るところで失敗を繰り返すので目がはなされず、どこで何をしていようとも、やすみなしに見護って下さろうためである。このおかげで、老少・善悪・智愚のものをへだてなく、おのおのがその所を得しめられて、その本分を発揮して、秋の七草が野山を飾るように、地上を荘厳させて下さるのである。

また寿命無量の誓願は、愚鈍なわれらが、いつまでたつても悟りがひらかけず、ひとり立ちが出来ぬのがあわれなばっかりに、いつまでも、どこどこまでも、手を執ってやりたいとの慈悲の発露である。このおかげで人生の四季、青年・壮年・老年・死後がそれぞれに荘厳せられてくる。道元禅師の「春は花、夏はほととぎす、秋は月、冬雪さえてすずしかりけり」の心境も自然にひらかれてくるのである。

（昭和五四年十月七日）

共に是れ凡夫のみ
（聖徳太子憲章・第十条）

自分をたなにあげてたがいに善し悪しのみを争いあう渦中にあって、私の耳にきびしくひびくのが「われ必ずしも聖にあらず、かれ必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ」の太子の声である。

われわれは凡夫という言葉をごく安易に使っているが、山を出て山の全体が見えるように、仏教では、高い悟りを得られた菩薩にして、凡夫の域を越えてはじめて自分は凡夫であったと自覚すると教えられる。その菩薩にして、われよしの慢心が砕けて、自然に他と同座して、腹蔵なく相

談して無理のない道を進むことが出来るのである。
さて私ども凡夫は、それを知る力はないが、仏陀の教えを聞信して、うなずかせていただくばかりである。換言すれば、自己流の判断を捨てて、その教を身にうけることである。
良寛師は「字習いの早道は、手本だけを見て、自分の手元を見るな」と言っておられる。
今も、この太子の仰せを鏡として、凡夫の身と知らされ、自他共に、盲人であり唖者であると自照せられて、足らぬところを互に補い合う道が自然に開けるのである。
（昭和五四年十二月二日）

仏の冥見をおそれる

ロンドンに留学していた某科学者が、早朝、街を散策していると、一人の子供が泣いていた。近寄って、わけをたずねると、ボールを投げて遊んでいたら、過って窓ガラスを割ったので、家の人が起きてきたら詫びようと思って待っていたら悲しくなって泣けてきたとのことであった。
そこで、家の人は誰も知らないのだから、黙って帰ってお行き！と云うと、子供は眼をまるくして、神様が知っていられる！と、顔を横に振った。この手供の一言に、その留学生は大汗をかいて、南条文雄師の宿にとんで来て、わびずれていた由である
私はこの記事を読んで以来、忘れられず、ただ人目をおそれ、人の口を気にすることに専念している自分、神仏の大きな眼を畏れぬ破廉恥さを省みさせられるようになりはじめた。
たしか安芸の念仏者が「見てござる、見てござる、お恥しいことじや南無阿弥陀仏、ありがたいことじや南無阿阿弥陀仏」と、いつも云っていたと聞いた。彼はこうじを売っていたが、人が見ていないとつい誤魔化したくなるにつれ、この言葉を思わずくりかえしたのであろう。
私が、京大の仏教学で教えをうけた羽渡了諦教授の最後の病床では、病に障るので大きな声を出さぬようにと、おそばの人が心配されるのに、たびたび、正信偈の
煩悩障眼雖不見　大悲無倦常照我
のところを大きな声で唱えられたとお聞きしているが、先生も、如来の常照の光明を仰がれつつ、浄土にかえられたのであった。
（昭和五五年二月三日）

浄土には「住き易くして人無し」

（大無量寿経）

諺に、親こころ子知らずとあるが、私ども悩悩に曇った眼には、仏陀の絶対真実のこころははかり知ることが出来

ない。しかし、知らぬ子を捨てる親はないように、仏陀は不請（ふじよう）の友となって、絶えず私共をあわれみはぐくんで下さるのである。それというのも、是非、善悪のみに走る相対差別の境界では、身にもつ煩悩にしばられて、善いことをするとうぬぼれ、悪いことになると卑屈になって、浮きつ沈みつ、争いのはてる時はない。
こうしたはてしのない生死の苦海にあっては、善悪をえらばず、智愚をへだてたまわぬ弥陀仏の本願の船のみが、やすやすと光明の彼岸に渡して下さるのである。
幸いによき人々に導かれて、願船に乗せられるとき、あだかも、盲の亀が広い海にあって、浮木にあえたと同じ喜びを得て、はじめて人間に生れたことのよろこび、着た衣類の如何でなしに、素裸のなりに「よくぞこの世に生れけり」と云えるのである。それなればこそ、死刑囚も、不治の重患者も、そのままに、おかげで心の眼を開けていただいたと、のこりすくない一日一日を大切に生かせていただけるのである。
（昭和五五年三月二三日）

我が弥陀は名を以て物（衆生）を摂したまう

（教行信証、行巻）

川上清吉氏が、次々と幼児を亡くした時、病が重くなると、はじめは子供の名を呼んで、元気を出せよと力づけるが、もう何を云っても通じなくなると、
「お父さんじやぞ、わかるかい！」
「お母さんもここに居るよ！」
と、親が自分を名告りながら、可愛いわが子をしっかりと抱き取るばかりであった、との記録を読んで、子の無い私には強い感動をうけた。
同時に、阿弥陀仏が、生死の苦海におのが罪から浮き沈みして、どうもがいてもたすかるよすがのない私共をお見抜き下さって、御自身の御名、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と名告られて、ここまでお出ででなしに、ここまで来て下さって、しっかりと摂取して下さる大悲の至極もここにあったと、大きくうなづかされた。
今度の大戦で中支で戦死した、無名兵士が最後の突撃を前に、故郷の母にとどけてくれるようにと、手帳に書きつけた句に、
たすからぬ身にしみわたる御名の声
とあった。忘れ得ぬ金句である。
（昭和五五年四月八日）

あとがき

新緑、快晴の五月となりました。あちらこちらに鯉幟りが威勢よくはためいて明るく輝いております。

さて本月号に、井上様がお忙しく原稿をいただけませんでした。御一代聞書は信から自然に顕現する行を教えられる大切なもので、歎異抄は徹底的に絶対他力の信をうかがえるものでこの二つをあわせ読むようにと、近角常観先生が仰言っていられます。

次に誌友の方から申出られていますので、本誌に執筆下さる方々の住所録を誌させていただきました。御感想やら御不審を直接お出し下さいますように、但し木村無相さんは白内障がすすみ片盲、難儀していられますのでその点お含み下さいますようにお願いします。

住所録

京都市右京区山田開町　浄住寺
㊥六一五　榊原徳草

京都市東山区今熊野日吉町四八―三九
㊥六〇五　川畑愛義

京都市左京区下鴨蓼倉町六八―一
㊥六〇六　西元宗助

神戸市灘区篠原北町三―九―二七
㊥六五四　井上善右衛門

岡山市津島、三―三―一
㊥七〇〇　山田　宰

武生市瓜生町　和上苑内
㊥九一五　木村無相

畏友蜂谷道彦君（ハチヤ）を悼

君は中学、六高、医大と私と同窓で、元広島逓信病院長だった二十年八月六日に自宅で被爆、身に重傷を負い乍ら病院に駈けつけて負傷者の手当をし、当時のメモを整理して三十年に「ヒロシマ日記」を出版、各国語に翻訳され、ハチヤの名は世界的に知られた。而も原稿料は総て被爆者救済の資に投じたと聞く。

四十一年中風で退官、郷里で静養中「一病息災」で生きられるだけ生きようと互に慰め合った間柄であった。私と同年七十六歳、逝く春を惜しむの情も切である。

散る桜、残る桜も、散る桜

○

＜御案内＞

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。一道会館の南隣り南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角
地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。市バス、御器所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午后一時半。（但し日曜を除く）尾西市三条板倉名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋　一〇四七〇番
郵便番号　四五七

慈光　第三十二巻　第五号　昭和五十五年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可